日本体育大学紀要 16 巻 1 号 (1986) 1-12

明治30年代の体操学校ラグビー
——高橋忠次郎の『実験普通遊戯法』の分析を中心に——

谷 釜 了 正

(昭和 61 年 6 月 2 日受付, 昭和 61 年 6 月 25 日受理)

Rugby in Japan's Oldest Private Training School of Physical Educators (1899-1903)
——A Historical Study——

Ryosho TANIGAMA

In 1899, the game of Rugby football was introduced to Keio University by Ginnosuke Tanaka, then returned from England after graduating from Cambridge University, and Prof. Edward Bramwell Clarke, who once played with the College Rugby team in Cambridge and who was studying in Japan as a member of the faculty of Keio University. Under the direction of the Keio University team, a Rugby team was formed in the Ota Middle School in 1908, and in 1911, one was formed in the Kyoto Third Higher School, a government preparatory school for the Imperial Government Universities. And in 1908, the Keio University Rugby Football Club published a coaching book of Rugby ("Ragubii shiki Futtoboru") for the first time in Japan.

However, excepting the Keio University team, between 1899 and 1906 Rugby football was played in Japan only by students of Japan's oldest private training school of physical educator. This institute was founded as the "Taiso Renshujo" by the Japanese Physical Education Society ("Nippon Taiiku Kai") in 1893 and in 1901, changed its name to the "Nippon Taiikukai Taiso Gakko". Moreover, this Society then strived for the popularization of Rugby football in Japan.

In this paper I am going to deal with the authentic history of Rugby football in this Training School and the role of the Japanese Physical Education Society in this Game, from 1899 to 1906. Mainly used as material for this study is the Book of School Play and Sports Game ("Jikken Futsu Yugiho"), published in 1901 by Training School physical educator Chujiro Takahashi.

The following results were obtained:

1) In the Book of School Play and Sports Game published by Takahashi, a teacher of this Training School, the game of Rugby football was explained. In order to explain the game, he attempted to play its with his students. His experiment was conducted between 1899 and 1901.

2) The Japanese Physical Education Society promoted Rugby in the following ways: In the Vth National Exhibition of Hypothec (Osaka, 1903), this Society exhibited a Rugby ball and explained the game of Rugby football in books on school play, sports, and Japanese physical culture published in 1903.

体育史研究室

1. 本稿の意図と課題

従前の日本ラグビー史研究は創世期のラグビーについて，概ね，次のように伝えている[1]。すなわち，明治32(1899)年の秋，慶応義塾大学予科の英語教師クラークEdward Bramwell Clarkeと，英国ケンブリッジ大学で学んだ田中銀之助のはからいによって日本人初のラグビーフットボールが慶応義塾の学生たちの間で実施され，しかもその後，慶応の学生たちは横浜や神戸の外人居留地の外人チームと対戦するかたわら，群馬県の太田中学（明治40）や京都の第三高等学校（明治43）にラグビーの種を播き，明治40年12月には啓蒙・指導書『ラグビー式フットボール』[2]の刊行をはかっている，と。

しかし，果して，慶応大学のみがこの時期にラグビー普及のための活動をしていたと断じてよいものであろうか。上掲のラグビー啓蒙書以外にも，明治31年刊行の『内外遊戯法』[3]において，また明治33年には工科大学生の三井末彦[4]によって，さらに翌34年には日本体育会体操学校教師の高橋忠次郎[5]によってラグビーが紹介されているだけでなく，明治36年には日本体育会および美満津商店（この時期における運動具店の大手，明治15年創業）によって「第五回内国勧業博覧会」（於：大阪）にラグビー・ボールが出品・展示されているからである[6]。もちろん，三井によるラグビーの紹介や，日本体育会のラグビー・ボールの展示は，『ラグビーフットボール』誌上において取り上げられているのだから，この時期の日本のラグビー史に関する調査・研究は，慶応ラグビーを軸としたものに限られていたとすることはできない。しかし，この問題については，慶応ラグビー以外の史実をわれわれに提供してくれる資料がほとんど発掘されていないこともあって，未だ詳かではないといわねばならない。つまり，ラグビーの紹介や啓蒙がはかられても，これを契機にラグビーが実施されたことを証してくれる資料が発見されていなかったわけである。

そこで本稿では，慶応ラグビー以外の未詳部分のうち，新資料がみつかった日本体育会体操学校のラグビーを取り上げ，若干の検討を加えることにし，次の二点を明らかにしようと思う。すなわち，その一つは体操学校生徒によるラグビーの実際であり，他の一つは日本体育会によるラグビーの啓蒙活動である。

2. 高橋忠次郎の『実験普通遊戯法』(上，下；明治34，35）にみる「実験」の意義と体操学校スポーツ

本邦の近代学校体育は，『学制』の発布以来，体操が中心となって展開され，明治19年以降は兵式体操がこれに加わってくる。このいっぽうで，体操の補助教材の扱いを第二次大戦の終結の時点までうけた遊戯は，明治18年の『戸外遊戯法』（田中盛業・坪井玄道編著）の刊行を機に，ようやくにして注目されるようになった。しかし，本書で取り上げられた，上級学校の生徒を対象にしたような種目を，小学校の児童に課すには余りにもむずかし過ぎるものであった[7]。ために，当然のことながら，20年代に入ると，多くの学校スポーツ種目は「簡易」なものへと改良されることにもなった[8]。これが30年代には，中学校でも課外運動としての戸外運動（＝スポーツ）が奨励されたことと併せて，一時的にせよ大流行することになる。

これは明治33～35年をピークに「遊戯書」の刊行となって現われ，その数は年間にして20冊を越えたといわれている。このような流行現象は，その後，長く続いたわけではなかったが，「流行」の結果として，次の引用にもあるように，“確かな成果”も得られたという[9]。

> 当時は実験遊戯書など「実験」という語がよく使われた。つまり実際に児童に試してみて，経験をもとに教材選択をしようという態度が遊戯において最も明白に現われたのである。体操や兵式のように，細かな点についての枠が規定されていなかったので，現場教師の創意が最も発揮しやすかった。

別言するならば，当時出版された「遊戯書」に冠された表記が語っているように，「実験」してみて，「簡易」な，場合によっては「新案」の遊戯が一つの運動種目から高等遊戯と下等遊戯の幅をもっていくつも考案されたのである。もちろん，ここでとりあげようとするラグビーなどの競技スポーツに関しては大幅な改良が加えられることはなかったとはいえ，実際に試してみるという「実験」のプロセスを欠くようなことはなかったのである。

これを代表するのは，次に取り上げる高橋忠次郎の遊戯書であろう（写真1参照）。

(1) 『実験普通遊戯法』上巻，
明治34年12月25日刊

(2) 『実験普通遊戯法』下巻
明治35年2月25日刊

本書タイトルから知られるように，高橋はまず遊戯を普通体操と同等の扱いをすべきものと考え，普通遊戯と呼んでいる。これは下巻の「序」の中で次のように述べ

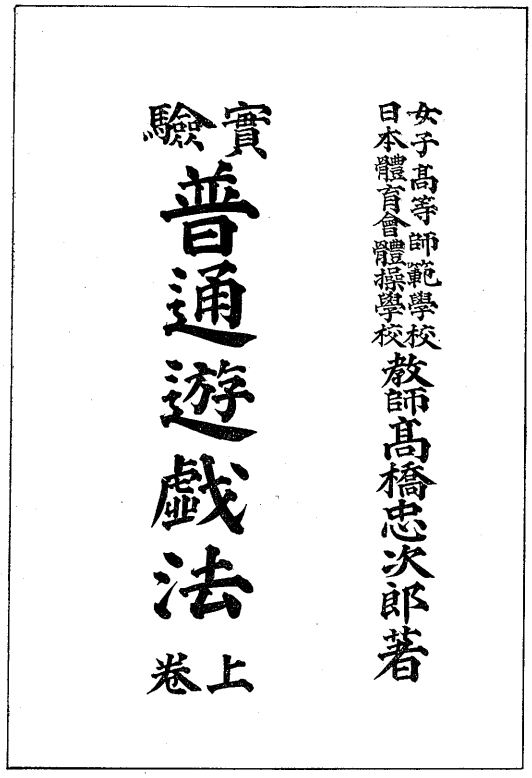

写真 1　著者高橋の肩書きとして日本体育会体操学校教師がみえる

ていることからも推すことができよう[10]。

従来中学校師範学校の学科目中体操を必修科として加へたるにも拘らず遊戯を加へざりしは日進月歩の今日に於ける一大欠点なりしなり夫れ体操を課するの要は全身各部の運動を均一ならしめて偏長の発育を防ぐに在りて存す之を換言すれば有形の肉体をして無形の心意の命令を速達せしむべき方法を練習するに外ならず蓋し遊戯は体操に徴りて得たる活動力を実地に応用すべき試験場なるべし宜なる哉文部省が法令を布きて中学校に遊戯を奨励すべきことを訓諭したるにあらずや。

それでは高橋忠次郎が本邦において奨励すべきであると考えた普通遊戯とはどんなものであったのであろうか。先掲の遊戯書（上・下巻）に限って取り上げると次の通りである。

（上巻）
- 競争遊戯（46 種）[11]
- クロッケー
- フートボール（ラクビー式，アッソシェション式）
- テンピンス
- ゴルフ

（下巻）
- ローンテニス
- ベースボール
- クリッケット
- ホッケー
- 玉突術

これらの遊戯は，競争遊戯（46 種目）を除けば，中等学校以上の学生を対象にしたスポーツであり，球技であったことがわかる。したがって高橋による「実験」の対象は，主として，「球技」に求められていたといえそうである。それではこれらの球技種目を実験しなければならなかった理由は何んであったのであろうか。当該遊戯書上巻の「序言」にその答えを求めてみることにしよう。

今や教育学理の方面に於ける研究は国運と共に長足の進歩を見るに至りたれども之を実地の方面の研究に徴すれば隔靴掻痒の感なきにあらず殊に学校遊戯法に於て其気味一層甚しきが如し従来遊戯書として世に公にせられたるもの少きにあらずと雖も其収蒐せる教授材料の杜撰なると分類方法の雑駁なると実地経験を遂げざるとに因り糢糊朦朧の気分を闡明して斯道に先彩を添ふるもの寥々として暁天の星も啻ならざるは何んぞや之れ蓋し皆著者自身が実地に練習をなさず随て此の方面の趣味を覚えず而して執筆するが為ならん。

もちろんこの引用から，実験の対象が球技種目に限っていた，ということはできない。しかし，球技種目においては，そのルールは複雑であり，通り一偏のルール解釈のみでは，十分に実施しうるものではないことも事実である。したがって，球技種目においてこそ，「実験」が必要であったと説明するのに，それほど多くの言葉を必要としないであろう。とまれ，この球技種目を実際に試してみる，という「実験」を実施するには，多くの人びとの助けを借りねばならなかった。後述の体操学校の生徒たちの協力なしには，高橋が「実験」普通遊戯法なるものを世に問うことができなかったのである。

3. 体操学校生徒による「実験」ラグビー

高橋忠次郎が『実験普通遊戯法』を著わすにあたって，「実験」の手助けを必要とし，体操学校生徒にその協力を求めている。このことは，体操学校生徒が，この時期にラグビーを体験したことを意味しているだけでなく，高橋の紹介になる「ラクビー式競技法」（写真2参照）が文献による紹介に留まらなかったことを表明している。実際に試してみた上での紹介だったのである。

さて，高橋による当該遊戯書をみてみると，上巻・下巻の双方に，実験を手伝った「日本体育会遊戯倶楽部員」の写真が姓名を付して掲載されていることに気付く。延べにして 51 名である。しかし，この遊戯倶楽部員を，体操学校運動部としての遊戯倶楽部に所属した部員，と解することはできない。当時の体操学校には，今日でいう運動部は存在していないからである。

『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』が教えているように，その「日本体育会遊戯倶楽部」は，日本体育会が設置する模範体操場の事業として設けられた“部”の一つであって，日本体育会の管理下におかれている。日本体育会体操学校の下部組織として運営されていたわけでは決してなかったのである。

けれども，この模範体操場で設けられていた運動“部”の構成員はどうであったのか，に目を転じてみると，体操学校の生徒が浮び上ってくる。たしかに，その模範体操場は国民体育推進の一環として設置され，ここで用意された運動“部”は一般市民に解放されていたのだが，その構成員の数からみれば，体操学校の生徒の方が圧倒的に多かったのである。この現象は，一つには当時の人びとがスポーツクラブに所属し，そこで汗を流すという習慣を身に付けていなかったこと，他の一つには体操学校に運動部が存在していなかったために，同校の生徒たちが模範体操場に出向いて，そこで設けられている“部”に所属し，練習にはげまねばならなかったこと，によるとみることができよう。因みに，ここでは，日本体育会遊戯倶楽部に所属していた部員を取り上げておこう。高橋の『実験普通遊戯法』上巻で掲載されている部員総数は，写真3にもあるように，25 名であった。大正 14 年 7 月に調査された『日本体育会体操学校校友名簿』[12] によれば，この 25 名中，14 名までが明治

諸學校に於て行ふ競技法なり然れども正式なる規則に據らずして行ふを常とす即ち本書の競技方法は如何に從來の方法と異へるかを記述して以て同好の士に告げんとす

甲　ラクビー式競技法

◎第一　遊技場

此の競技法は之をアッソシエーション式競技法に比すれば幾分の廣濶なる地所を選ばざるべからず何となればアッソシエーション式に於ては手を使用する機會皆無なりと雖も此の式は手を使用するに於て自由を許され居るを以て比較的廣き場所を要する理由も伴生すべし然れども土地狹隘なりとて其地所一杯に設計するは宜からず少くとも技場の四邊には五間の餘地ある樣に

第三章　フートボール　甲　ラクビー式　八十七

写真 2　高橋忠次郎によるラグビーの解説（『実験普通遊戯法』（上巻）より）

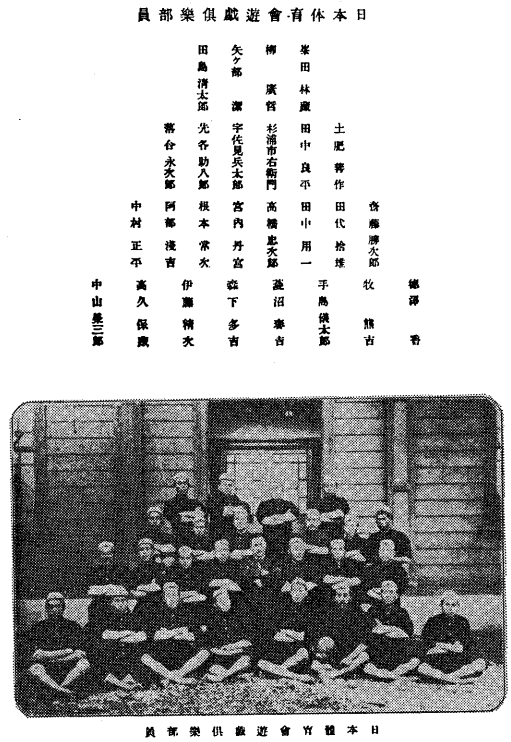

写真 3　日本体育会遊戯倶楽部員（明治 34 年 12 月現在）

表 1　日本体育会遊戯倶楽部員と体操学校生徒*

(明治 34 年 12 月現在)

日本体育会遊戯倶楽部員		
体操学校生徒	体操練習所卒業生	
峯田林蔵○	先各(名)助八郎	矢ヶ部潔
田中良平	中山英三郎	土肥善作
田代捨雄	柳広哲	落合永次郎
宮内丹宮○	宇佐見兵太郎	斉藤勝次郎
中村正平	阿部浅吉	森下多吉
牧熊吉		高久保蔵
菱沼春吉		
田島清太郎		
杉浦市右衛門		
田中用一		
根本常次		
徳沢香		
手島儀太郎		
伊藤精次		

* ○印は体操練習所別科卒業後，体操学校高等本科に入学した生徒.

35 年 9 月に卒業した体操学校高等科の生徒であり，さらにもう 5 名が体操練習所別科を明治 34 年 3 月に卒業した人物であることがわかる (表 1)。

かくて，高橋忠次郎の『実験普通遊戯法』上巻の中で紹介された「ラグビー式競技法」は，多くの体操学校の生徒の協力を得て「実験」されたものということができよう。それではこの「実験」なるものが，いつ，どこで実施されたのであろうか。

明治 32 年の秋，本邦初のラグビーは慶応義塾の学生たちの間で実施された。これは日本ラグビー史における定説ともなっている。しかし，果して，このように断じてよいものであろうか。体操学校の生徒によるラグビーの「実験」は，明治 32 年の 5 月から秋の間に実施された可能性もあるからである。

この「実験」ラグビーの験者，高橋忠次郎は明治 32 年 5 月に依田直伊と小野泉太郎の推薦により体操学校の前身である体操練習所の教師として招聘されているのであるが，「上京して三か月後，早くも『最新ベースボール術』を依田・小野と共著で出版し，続いて翌 33 年には『音楽応用女子体操遊戯法』を依田との共著で出版し，中央の遊戯界での実力を発揮していった」[13] という。したがって，この高橋忠次郎の精力的な仕事ぶりから推してみると，赴任の当初から『実験普通遊戯法』刊行の構想が練られ，着々と「実験」が重ねられていたとみることができるわけである。だとすれば，その『実験普通遊戯法』の上巻に掲載された「ラクビー式競技法」は“競争遊戯”と“クロッケー”に次いで取り上げられていることからして，体操学校の前進である体操練習所において明治 32 年 5 月から秋にかけて「実験」した成果が盛り込まれているとみなければなるまい。次に引用する二つの主張こそ，そのような推測を可能にしてくれるからである[14]。

予浅識寡聞此の欠点を補足するの任に堪へず然れど多年斯る目的を以て実地の研究に従事せり乃ち練習の都度稿を草して筐底に蔵めたる幾十回なるを覚えずさるを空しく蠹魚の口腹にのみ充つるは素より快しとせず所謂雞肋の情自ら禁ずる能はざりし時に当り幸に文盛堂主人の懇請辞し難く今玆に上梓する以所のものは斯道の進歩上又微衷の存するありてなり若し本書編者に因り斯道に少補あるを得ば著者の光栄何ものかえに加えん

本書は著者自ら実験したる順序方法に依りて記述し其参考書としては現時日本体育会女子高等師範学校等に蔵むる原書を数多用ひたりされば其大体は彼の国民の遊戯方法と同一なりと雖も本邦人に適せざる處は一々其理由を附記して読者の判定に任でんことを努めたり

さらにこの二つの引用に加えて，高橋が，「ラグビー式は本邦学生間に行はれず唯横浜なる外人等の行ふを見るのみなりしなり」[15] と断じていることは，本邦ラグビー史上，注目に値しよう。本書『実験普通遊戯法』上巻が刊行された“明治 34 年 12 月 25 日”，および本書の序言で誌されている日付“明治 34 年 12 月下旬”は，本邦初の国際試合すなわち慶応義塾と横浜外人倶楽部との試合 (明治 34 年 12 月 9 日) の後の日付なのである[16]。

以上の事柄から，われわれは次の二つの疑問をもたざ

るを得ないわけである。

(1) 麻布の仙台原で実施されていたとされる慶応義塾の学生たちによるラグビーが，本書刊行の頃まで高橋の耳に達しなかったと考えるには余りにも時間がたちすぎていること。

(2) 本書で取り上げたスポーツを「実験」するにあたって，高橋は「本書を編集するに就きては横浜公園運動場アマチャ倶楽部監督者吉原君の助言を受けしこと少なからず今玆に明記して其好意を深謝す」[17] と本書「凡例」中で述べているだけでなく，ラグビー場の「設計は重に横浜公園なる運動場に於て外人等が演習する時の寸法故競技する連中の年令により多少斟酌すべきは勿論なり」[18] と語っていることから推し測ってみると，横浜でのラグビーに関する情報を，高橋が入手できない状況にはなかったと考えられること。

このようにみてみると，明治 34 年 12 月 9 日の，慶応と横浜外人倶楽部との歴史的な試合が，高橋の耳にまで達していなかったということはできないように思われる。したがって，『実験普通遊戯法」上巻中に取り上げた「ラクビー式競技法」は，慶応義塾の学生たちがラグビーを実施する以前に，「実験」され，草稿を了えていたものといえそうである。しかしながら，だからといって，慶応ラグビーよりも体操学校ラグビーの方がその実施において早かったと断ずることは危険であろう。いずれを先とするかの判定を下すための決定的な材料を欠いているからである。

したがって，ここでは資料上から，明治 34 年には体操学校の生徒たちによってラグビーが「実験」されていた，とみなすことにしておきたい。日本体育会体操学校の生徒たちが中心になって構成されていた，“日本体育会遊戯倶楽部員”の写真が，明治 34 年刊行の，「ラクビー式競技法」を紹介した当該書に掲載されていることを唯一の根拠としなければならないからである。すなわち，その遊戯倶楽部員中の体操学校の生徒が，明治 34 年4月に入学し，翌 35 年の9月に卒業していることから推してみると，明治 34 年 4 月から，『実験普通遊戯法』上巻が刊行された同年 12 月までの期間に，ラグビーの「実験」が試みられたとみなければならないわけである[19]。

次いで，体操学校の生徒たちによって「実験」が試みられた場所についてであるが，このいわゆる「実験場」について，高橋は特に述べているわけではない。しかし，体操練習所ないし体操学校の運動場が実験場に当てられた，とみなしてよいように思われる。依田直伊や小野泉太郎との共著で刊行された，高橋による『最新ベースボール術』(明治 33 年8月刊) では，『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』が伝えているように，日本体育会「野球部員石井氏外」が「体操練習所」で野球をした，と誌されているからである[20]。つまり，野球を実施しうるだけのスペースを体操練習所の運動場が有していたのだから，ラグビーの実験場として，その運動場は十分に機能しえたわけである。『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』は，可児徳の談話を中心として，運動場を次のように再現している[21]。

(運動場は) 正方形の運動場で，5～600 坪程度の広さがあった。運動場の形が適当で，移転後の牛が淵よりも使い易く広く感ぜられた。

この体操練習所の運動場は，東京麹町区飯田町 4 丁目 30 番地 (現在の飯田橋貨物駅付近) の本校に付設され，開校 (明治 26 年 3 月 3 日) と同時に開場されたのだが，明治 33 年 5 月 1 日に本校が麹町区飯田町 1 丁目字牛ガ淵 (現在の千代田区役所付近) へ移転するまで使用された。したがって高橋忠次郎が本校に赴任した明治 32 年 5 月から向う 1 ケ年の間に，ラグビーを実験したとすれば，その場所は体操練習所の運動場ということに

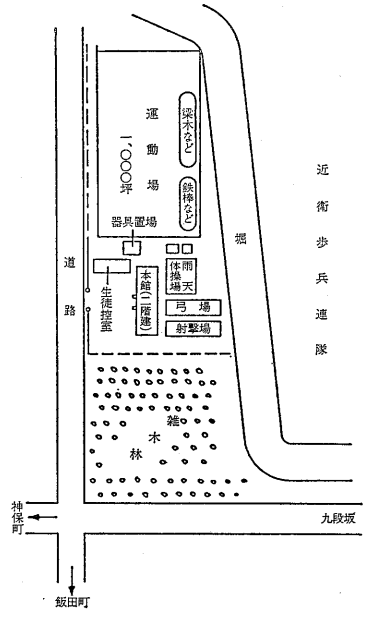

図 1　体操学校の運動場『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』p. 192 より転載

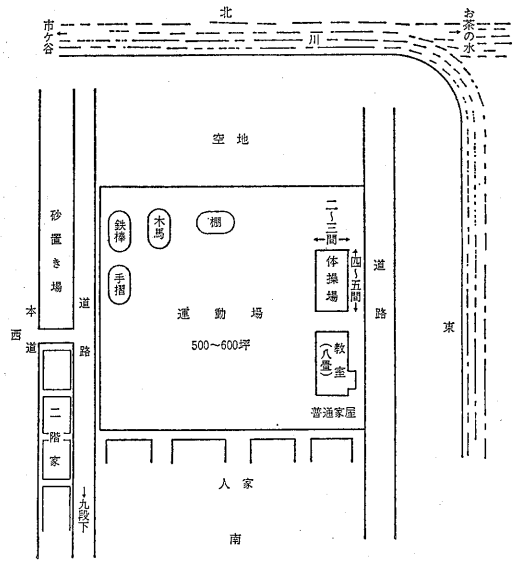

図 2　体操練習所の運動場『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』p. 139 より転載

なろう（図 2，参照）。

これに対して，高橋によるラグビーの実験は，牛ガ淵へ移転した時点から明治 34 年 12 月の間に試みられていたとすれば，模範体操場と共用の，体操学校の運動場（形状：長方形，千坪）の方が「実験場」ということになる。したがって，体操学校生徒によるラグビーの「実験」がなされた年を，本稿ではとりあえず，明治 34 年とみなしているのだから，その実験場もこれにあわせて，体操学校の運動場であったとみなければなるまい（図 1，参照）。

4. 日本体育会の事業にみるラグビーの啓蒙

前出の『実験普通遊戯法』は榊原文盛堂より発行されている。この点では，本書の刊行それ自体は日本体育会および同体操学校による遊戯・スポーツ活動とは無縁であり，したがって本書中に解説・紹介されたラグビーも著者個人の啓蒙活動にすぎないといえよう。しかし，著者が「女子高等師範・日本体育会体操学校教師」の肩書きをもって本書を出版し（写真 1，参照），併せて「実験」の協力者「日本体育会遊戯倶楽部員」の写真（写真 3，参照）をも掲載しているという点からみれば，間接的であるにせよ，著者高橋忠次郎によるラグビーの啓蒙は，日本体育会および同体操学校による啓蒙活動と連なっていたといえそうである。これに対して，日本体育会による解説書の刊行や，勧業博覧会へのボールの出品・展示の方は，ラグビーの啓蒙としてはより直接的であった。

(1) 解説書の刊行

明治 36 年 4 月，日本体育会は『日本之体育』（上・下編）を刊行する。本書下編中に「ラグビー式」の「フート，ボール」が紹介・解説され，ラグビーの啓蒙が書籍を通して図られることになった。これは，次の引用にあるように，本書刊行の意図より推し測ることができよう[22]。

> 明治 36 年第五回内国勧業博覧会ノ大阪ニ開カルルヤ本会ハ此ノ好機ヲ逸セズ場内ニ運動場ヲ設ケ器械ヲ備ヘテ一般公衆ノ使用ヲ許スト共ニ内外古今ノ参考品ヲ蒐集シテ参考ニ供セリ。本書ハ即チ之ニ基キ我ガ国古今体育ノ状況ヲ記述シテ世ニ公ニシ以テ体育奨励ノ実ヲ挙ゲンコトヲ期シタルモノナリ。

このように，『日本之体育』刊行の目的は，同年 3 月より開催されていた第五回内国勧業博覧会に日本体育会が出品・展示した体育・スポーツ用器具を解説するところにあったわけである。その用器具の中に“ラグビー用ボール”が含まれていた。したがって本書中に解説されたラグビーの競技法なるものは，書籍の出版によって人びとの目にとまることを期待するレベルから，博覧会入場者に限るものであったにせよ，強烈な関心を人びとに懐かせる段階へと進展させる効果があったと思われる。いまだ目にしたことのない楕円形のボールに魅せられた人びとは，ラグビーの競技法そのものに関心を寄せたに違いないからである。

それでは日本体育会がラグビー・ボールを出品した契機はどこにあったのであろうか。これを解く鍵を，ここでは明治 35 年 5 月 20 日付けで日本体育会が当該の博覧会に参加するために組織した「特設体育場経営委員」に求めておきたい。その委員とは次の通りである[23]。

辻　新次	三宅　秀（医　博）
嘉納治五郎	寺田勇吉
山根正治	篠田利英
富士川　游（ドクトル）	川瀬元九郎（ドクトル）
高島平三郎	山口酉三郎
高橋忠次郎	小野泉太郎
可児　徳	佐藤福雄
松田正典	

これら委員のうちに，高橋忠次郎が選任されている点

は注目に値いする。日本体育会遊戯倶楽部員の協力を得てラグビーの「実験」を試みた高橋が，ラグビー・ボールの出品を提案したことは想像にかたくないためである。また，当該調査委員に任ぜられた小野泉太郎や佐藤福雄らの遊戯・スポーツの推進者たちも，高橋の提案を後押ししたに相違ない。だとすれば，『日本之体育』において取り上げられたラグビーは，高橋の解説になるものであったとみることもできるわけである。

いっぽう，この『日本之体育』では，本文中に取り上げられた“ラグビー式フートボール”の不十分な点は次の文献によって補うよう指示されている。

(1) 日本体育会編纂『新撰遊戯法』(明治 36 年 6 月刊)
(2) Marriott, C. P. B./C. W. Alcock: Foot ball (ovaleries).

『新撰遊戯法』では，「フート・ボール」は高等遊戯の一つとして位置づけられ，ラグビーは“「ラグビー」流フート・ボール”として表記されている。この「ラグビー」流は『日本之体育』で扱われた「ラグビー式」と同様に，解説に割かれた量という点ではさほど多くはない。しかしその解説の内容は「ラグビー式」よりも詳しいものとなっている。ここではラグビーを実施するに必要な知識が五つに分けられて解説されており[24]，挿図も的確であった（図 3，参照)。

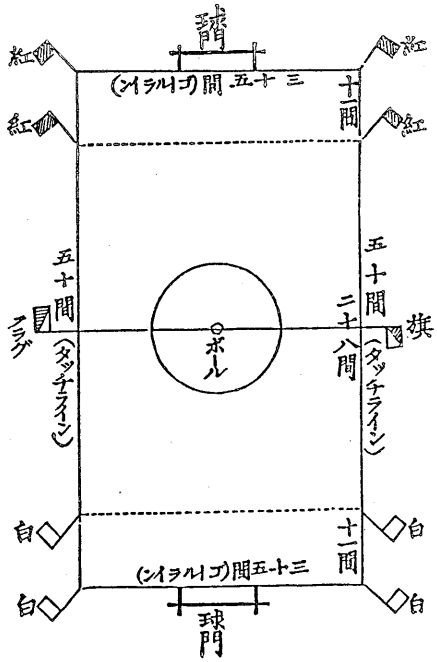

図 3　ラグビー場の区画『新撰遊戯法』p. 102 より転載

このような日本体育会によるラグビーの紹介は，読者によるラグビーの実施に直接連なったかどうかは不明である。しかし，本格的なラグビーの解説書『ラグビー式フットボール』(慶応義塾蹴球部編，明治 42 年 11 月) が登場するまでの期間において，ラグビーという競技を周知させようとしたという点では評価されてよいであろう。このことはラグビー用のボールの紹介とて同様であった。

(2) ラグビー・ボールの展示

日本体育会が第五回内国勧業博覧会において出品・展示したボールとはどのようなものであったのであろうか。『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』が取り上げているところの資料では，「ラグビー」ボール 1 個とか，「ラグビー式」のボールとかの扱いがなされているにすぎない[25]。展示品を解説した『日本之体育』をみてみても，ラグビー用の「鞠」は「楕円形」のものであるとしか説明されていないし[26]，本書の解説を補足・説明しているはずの『新撰遊戯法』においても，ラグビー用の「ボール」(鞠) は「卵形」のものであると示しているにすぎないのである[27]。

したがって，当該の博覧会において展示されたボールは，別の視角から明らかにされねばならない。その手立てとして，まず第一に，高橋忠次郎によって著わされた『実験普通遊戯法』(上巻) を取り上げておこう。当該博覧会にラグビーボールを出品するよう提案したのが，すでにラグビーの「実験」をおえていた高橋であったと思われるからである。この高橋によれば，ラグビー・ボールとは次のものであった。すなわち，「ラクビー式競技法」にて使用する「ボール」は「楕円形」であり，「其最長の處にて 1 尺 1 寸周囲 (横の周囲) 2 尺 5 寸」のもので，「普通の寸法故何人にも恰好のもの」であった[28]。

第二に，当時の運動用具店の最大手「美満津商店」(明治 15 年創業) が同じ第五回内国勧業博覧会にて展示したボールに注目しておきたい。その時，日本体育会が出品した「体育場」は美満津商店によって建設されており[29]；したがって本会が展示したラグビー・ボールは美満津商店より調達されたものとみなしうるからである。美満津商店主の伊東卓夫は，この博覧会において，日本体育会の「体育場」建設を請け負っただけでなく，自らも東京の業界を代表して学校教育用品や体育・ス

ポーツ用器具を多数，出品・展示している。この展示品の中には次のラグビー・ボールも含まれていた。すなわち，「ラグビー流フートボール三号」，「同四号」，「同五号」および「同六号」である[30]。

この四種類のボールのうち，日本体育会が出品・展示したボールはいずれの大きさであったのであろうか。同時に展示された「アッソシェーション」式のボールが「六号」の大きさであったことから推してみると[31]，ラグビー・ボールの場合もこれにあわせて「六号」のサイズではなかったか，と思われる。いっぽう，このボールは，“勧業博覧会”にて展示されたものなのだから，国産品ではなかったか，と想像をめぐらすこともできる。しかし，次の引用によって知られるように，当時は未だ国産のボールの誕生をみるに至ってはいなかった[32]。

> 次ぎにラグビーですが此れはア式より後れて我国に出来た様に思はれます。尤も有る事は相当古くから有りましたが，本式の競技にしたのは明治四十四，五年頃ではないかと思はれます。其頃は東京では慶応義塾，関西で同志社が有った丈けでした。其使用球も皆英国シルコック会社製品でした。

このように，当時のラグビー・ボールは輸入品によってまかなわれており，その中心は英国シルコック社製のものとみなすことができる。しかし，美満津商店は英国製品を扱う前に米国製品を扱っていたようである。本邦初のスポーツ総合誌『運動界』の明治 33 年 9 月号誌上において，図 4 のような米国製ラグビーボールの宣伝広告をだしているからである。

それでは，この「米国製」のボールとは，いずれの製造業者製のものであったのか。当時，日本の運動具輸入業者と取引していた米国の業者に関しては，スポーツ史学界においても未詳であり，したがって米国の業者を特定することは困難である。そこで，昭和初年代に国内の製造業者が競争相手とみていた，英米の業者なるものを

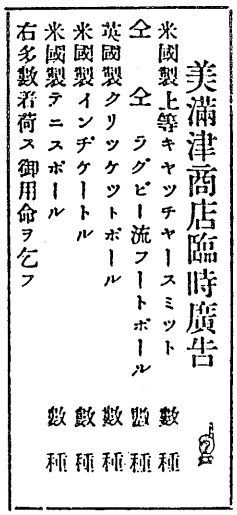

図 4　美満津商店が『運動界』誌上に出した広告。(明治 33 年 9 月)

表 2　英米の運動具製造販売業者一覧*

国　名	製造社・販売業者	主な輸入品目
英吉利	スラセンヂャー会社	庭球用硬球
	エー，ヂー，スパルディングアンドブラザース会社	ラケット，ゴルフ用具
	マンゴマニアクチュアリング会社	ゴルフ用具
	ギブソン会社	同
	ノースブリテッシラバーコンパニー	同
	ウイリアムエリス会社	同
北米合衆国	ビィリングスアンドスペンサー会社	ゴルフ用具
	ドッヂアンドセイスーマ会社	ローラースケート
	エル・エー・ヤングゴルフ会社	ゴルフ用具
	ハンナマニュファクチュアリング会社	野球用バット
	クラウホードマッククグレゴール会社	ゴルフ用具
	エー，ヂェー，リーチライトアンドディットソン会社	ゴルフ用具，庭球用具
	ウイルソンウェスターンスポテインググッド会社	ゴルフ用具
	アール・エッチ・バーク会社	同

*『東京運動具製造販売業組合史』昭和 11 年 1 月刊，pp. 235～236 より

取り上げ，大胆に想像力を働せてみることにしたい。競争相手とは表2の通りである。

表2で取り上げられている，「英吉利」の「エー，ヂー，スパルディングアンドブラザース会社」とは A. G. Spalding and Brothers (Bros) と表記される，いわゆる「スポルディング社」(1876 年創業) のことである。したがって，この会社は「英吉利」ではなく，「北米合衆国」に属すものといえよう。この米国の業者との取り引き額は，昭和 7 年には，「テニス具野球具フットボール具及同附属品（テニス硬球除く)」に限った場合でも，11,702 円に及んでいる。この輸入額のもつ意味を詳細に検討することが本稿の目的ではないので，別の機会に譲るとして，ここではスポルディング社に注目しておきたい。明治期においてわが国に米国製のラグビー・ボールが輸入されていたことに対して，誰しもそれをスポルディング社製のものではなかったと考えるからである。野球やテニスの用品が中心であったとはいえ，スポルディング社製のラグビー・ボールが美満津商店によって輸入されていた，という推量は十分に成り立つわけである。しかし，これを裏付けてくれる資料を欠いているので，断定することは避けねばならない[33]。

とまれ，日本体育会の勧業博覧会におけるラグビー・ボールの出品・展示は，入場者たちにラグビーというスポーツに対する興味を少なからず懐かせたということができる。しかし，明治 36 年の勧業博覧会におけるラグビー・ボールの展示や，ラグビーの解説書の刊行をピークに，日本体育会によるラグビーの啓蒙活動は，経営危機に直面することによって，徐々に消滅していった[34]。したがって，明治 30 年代に日本体育会体操学校の生徒たちが，慶応義塾の学生たちと同様に，ラグビーという競技を体験した，という事実はいつしか人びとの脳裏から消えうせてしまったといってよいであろう。日本のラグビー史において，明治 30 年代のラグビーが慶応を軸に展開されているのは，こんなところに理由があったわけである。

5. 結　　語

本稿のねらいは高橋忠次郎による『実験普通遊戯法』(上巻) を頼りに，明治30年代における日本のラグビーの実際を明らかにしようとするものであった。もとより資料的な限界もあって，当時の慶応ラグビー以外の動向を十分に解き明かせるものではないが，以下のような若干の成果も得られたように思う。

1) 明治 34 年 12 月に刊行された高橋忠次郎の『実験普通遊戯法』は，日本体育会遊戯倶楽部員の助けを借りて，各種の遊戯・スポーツ種目，とりわけラグビーなどの球技種目を，実際に試してみた上で，つまり「実験」した上で，執筆されたものであった。したがって，本書に先立って刊行された，『内外遊戯法』(明治 31 年刊) や『フートボール・自転車』(明治 33 年刊) におけるラグビーの翻訳・紹介とは質的に異っていたといわねばならない。

2) そのラグビーの「実験」の手助けをした遊戯倶楽部員 25 名の内訳は，体操学校生徒 14 名と一般人 11 名であったが，一般人 11 名のうち，5 名が体操練習所 (体操学校の前身) の卒業生であった。このことは，高橋が“日本体育会体操学校”の肩書きで当該遊戯書を著わしていることを併せて考えた場合，日本体育会遊戯倶楽部のラグビーを，日本体育会体操学校ラグビーと読みなおすことも可能であること，を示している。

3) この「実験」の年月日は体操練習所に赴任した明治 32 年 5 月から，当該遊戯書の刊行された明治 34 年 12月までの期間に求められる。しかし，この期間をさらに絞り込むための資料はないので，当該の遊戯倶楽部員の体操学校の入学～卒業期間 (明治 34 年 4 月～35 年 9 月) から推測しなければならない。これによれば，「実験の年月日は明治 34 年 4 月から 12 月の期間にまで絞り込むことができる。

4) 「実験」の場所は，「実験」の年月日と関係する。高橋による実験が彼の体操練習所への赴任直後からはじまったとすれば，その実験場は体操練習所の運動場となる。これに対して，3) で絞り込んだ年月日において実験が試みられていたとすれば，体操学校の運動場ということになろう。

5) この高橋による「実験」ラグビーのほかにも，日本体育会は体操学校を基盤に，ラグビーの啓蒙活動を計っている。その一つは，恐らく高橋の意向が強く働いたとみられる，『第五回内国勧業博覧会』(明治 36) へのラグビー・ボールの出品・展示であった。このボールは米国製のものであったと思われるが，米国のどの業者の製品であったのかを特定することはむずかしい。

6) また，その博覧会における展示品の解説を兼ねた単行書『日本之体育』(上・下編，明治 36) の刊行を通して，ラグビーの啓蒙が計られた。加えて，そのラグビー解説の底本となった『新撰遊戯法』(日本体育会編，明治 36) も，体操学校の卒業生を介して，ラグビーの啓蒙を計っていたとみることもできそうである。

付　　記

本稿は日本体育大学学内奨励研究費（昭和 60 年度）に基づく研究成果の一部である。なお，現在進行中の本学ラグビー部史編纂にあたって収集された資料も，本稿執筆にあたって有益な示唆を与えてくれた。編集委員長の綿井永寿教授，ならびに資料提供を戴いた柴田紘三郎助教授に，この紙面を借りて，謝意を申し上げる次第である。

注記と引用参考文献

1) これについて敍述されている代表的な文献は次の通りである。
   - 日本ラグビーフットボール協会編:『日本ラグビー史』，昭和 39 年 11 月 pp. 1～75
   - 田辺九万三:「明治時代のラグビー」(1)～(6),『Rugby Football』第 1 巻第 1～6 号，昭和 26 年 10 月～27 年 6 月。
   - 日本体育学会体育史専門分科会編:『日本スポーツ百年の歩み』，ベースボール・マガジン社，昭和 42 年，pp. 218-219
   - 池口康雄:「日本ラグビー創生記」，『ラグビー』，昭和 49 年 8 月，pp. 144-149
   - 木村　毅:『日本スポーツ文化史』ベースボール・マガジン社，昭和 53 年，pp. 120-123
   - 池口康雄:『近代ラグビー百年』ベースボール・マガジン社，昭和 56 年 9 月，pp. 132-151
   - Japan Rugby Football Union: "Rugby Football in Japan—A Brief History", n.d. Tokyo, 6 p.
   - 畠山元彰:「日本ラグビーの歩み」，『ラグビー』，昭和 47 年春季号，pp. 90-95
2) 慶応義塾蹴球部:『ラグビー式フットボール』博文館，明治 42 年 12 月，220 p.
3) 大橋又太郎編:『内外遊戯法』博文館，明治 31 年 6 月，236 p.
4) 三井末彦:『フートボール・自転車』(『内外遊戯全書』第 15 編) 博文館，明治 33 年 11 月，pp. 1-45
5) 高橋忠次郎:『実験普通遊戯法』(上巻) 榊原文盛堂，明治 34 年 12 月，pp. 87-114
6) これについては以下の文献を参照されたい。
   - 田尾栄一:「ラグビーの資料 (2)」，『ラグビーフットボール』第 11 巻第 3 号 (昭和 36 年 12 月)，pp. 49-50
   - 田尾栄一:「わが国ラグビーの古書」，『ラグビーフットボール』，第 10 巻第 4 号 (昭和 35 年 12 月)，pp. 55-56 (なお本書では次のような興味ある事柄について触れられている:「『ラグビー』の言語と競技状況は明治 23 年に発行された淮亭居士高橋義雄著『英国風俗鏡』の蹴鞠篇に『ラクベ』と呼称してその競技状況とともに記されているのが，わが国の文献にあらわれた最初である」(p. 55)
   - 『第五回内国勧業博覧会出品目録』(第九部　教育・学術・衛生及経済全)—別館—，金港堂，明治 36 年 2 月，p. 8
   - 木下秀明:『学校法人日本体育会 日本体育大学八十年史』学校法人日本体育会，昭和 48 年 12 月，pp. 295-308
7) 本書で取り上げられた種目は次の 21 種目であるが，高度な球技種目が含まれていた: 鹿ヤ鹿ヤ，盲目鬼，鬼遊，卵帽子，日月火水，投球競争，旗拾ヒ競走，旗戻シ競走，二人三脚，嚢脚競走，ポーム (攫球)，綱引，行進法，投環（クォィツ），投球 (ボールス)，トロコ，フートボール，循環球 (クロッケー)，ローンテニス，ベースボール，操櫓術。
8) この時期に，すべての学校遊戯（スポーツを含む）が「簡易」なものへと改良されたわけではない。後述にあるように，実際に試してみるというプロセスを経て，当該種目の理解が深められたケースもあった。この傾向は競技スポーツとしての球技に多く認められる。
9) 岸野雄三他:『近代日本学校体育史』，東洋館出版社，昭和 34 年 7 月，p. 58
10) 高橋忠次郎:『実験普通遊戯法』(下巻) 榊原文盛堂，明治 35 年 2 月，序。
11) ここでいう競争遊戯は上巻で取り上げられ，その数は次にあげる 46 種目であった。しかし，上巻の総頁数 144 のうち，67 頁をその 46 種目にあてたにすぎず，残りを，クロッケー，フートボール，テンピンス，ゴルフの 4 種目に当てている。高橋の球技に注いだ情熱はこれによって知られるわけだが，本文中で触れているように，高橋にとって「実験」のプロセスを欠いた球技の解説は考えられなかったといえよう: 数学競走，筆者競走，担荷競走，唖人と盲馬（其一，其二），連体競走，一脚競走，端艇競走，売買競走，蛞蝓競走，韓信競走，変装競走，戴嚢競走，猫袋競走，騎士旗競走，狐狩り，一脚飛び，束脚競走，地球運び競走，地球送り，土俵競走，摺足競走，障害物競走，織物競走，輪貫競走，卵奪ひ，群竜争珠，海戦，陸戦，勢競べ，不倒翁，昼夜遊び，仏蘭西鬼，盲目漁師，獅子狩り，木馬飛び，双竜の闘，二人盲，狂獅子，郵便配達，源平合戦，春夏秋冬，球当て，達磨落し，稲干競争，球運び。
12) 日本体育会体操学校講演部編:『日本体育会体操学校校友名簿』—大正 14 年 7 月調査—，大正 14 年 10 月，p. 6
13) 藤村学園八十年史編集委員会:『藤村学園八十年の歩み』学校法人藤村学園，昭和 58 年 5 月，p. 62
14) 高橋: 前掲書（上巻），序言 p. 2 および凡例 p. 1
15) 高橋: 同上書，p. 86
16) 田辺九万三:「明治時代のラグビー」(1),『Rugby Football』第 1 巻第 1 号（昭和 26 年 10 月)，p. 20
17) 高橋: 前掲書（上巻），凡例 p. 2
18) 高橋: 同上書，p. 92
19) 高橋による『実験普通遊戯法』(下巻) 中に掲載されている遊戯倶楽部員の写真は，このことを裏付け

てくれるように思う。すなわち，当該部員を体操学校の卒業年次からみると，彼らは 26 名中 20 名までが明治 34 年 12 月に体操学校高等本科を了えており（第一期卒），上巻で示されている生徒たち（第二期卒）よりも 9 ヶ月余り早く卒業している。このことは，本文中に掲げた下巻中の球技種目の方が，より早く実験された可能性があることを示している。よって，明治 34 年にラグビーの実験がなされたとすることも可能となるわけである。ただし，下巻中の写真にあるように，野球とクリケットのみが体操学校高等本科第一期卒の学生によって実施され，上巻中のラグビーは彼らによって実施されているとみることもできる点は留意されねばならない。上巻掲載の写真から，サッカーの実施を推測できても，ラグビーの方は無理があるためである。

20) 木下：前掲書，p. 250
21) 木下：同上書，p. 140
22) 日本体育会編：『日本之体育』（上・下編），育英社，明治 36 年 4 月，序 p. 1–2
23) 「第五回内国勧業博覧会場内日本体育会特設体育場開閉始末」，『体育』第 118 号，明治 36 年 9 月，p. 44
24) 本書では次の 5 項目に分けて解説されている。すなわち，「用具」，「演技場」，「演技者」，「演技者の責務」，「演技規則」である。
25) 木下：前掲書，pp. 303, 306
26) 日本体育会編：『日本之体育』，前掲書，下編 p. 67
27) 日本体育会編：『新撰遊戯法』育英舎，明治 36 年 6 月，p. 101
28) 高橋：前掲書（上巻），pp. 90–91
29) 木下：前掲書，p. 305
30) 『第五回内国勧業博覧会出品目録』前掲書，p. 8
31) 「第五回内国勧業博覧会場内日本体育会特設会場開閉始末」，前掲書，p. 44
32) 玉沢敬三編：『東京運動具製造販売業組合史』，東京運動具製造販売業組合，昭和 11 年 1 月，pp. 263–264
33) アメリカでは，いつごろからラグビー・ボールが製造されるようになったのか，は定かではない。スポーツ用品製造・販売店マルスターズ社（James F. Marsters, 1861 年創業）のカタログをみると 1880 年代にはまだ輸入品でまかなわれていることがわかる（James F. Marsters, Manufacturer and importer of outdoor and indoor games, and dealer in sporting goods of every description. Brooklin, N.Y., [1887?], p. 12, 日体大図書館蔵）。この会社では当時，サッカー・ボールが製造・販売されているので，1903（明治 36）年にはラグビー・ボールを製造・販売した可能性は高い。いっぽう，マルスターズ社のカタログから，スポルディング社は当時，野球やテニスの用品の製造・販売業者であったことを知ることができるのだが，だからといって，1903 年頃にラグビー・ボールを製造していなかったと断ずることもむずかしい。米国側からの資料の発掘が望まれるところである。なお，大正 4 年の美満津商店カタログ『美満津商店懐中用定価表』によると，English mark の付いたラグビー・ボールが販売されているので，同商店が明治 33 年に『運動界』誌上で広告した“米国製”のラグビー・ボールは，大量に入荷されることはなかった，といえそうである。
34) 日本体育会の経営難という事実だけでなく，高橋忠次郎というラグビーの指導者を欠いた点も大きかった。高橋は明治 36 年 9 月に体操学校を辞し，女子体育の振興に尽力することになったためである。なお，明治 38 年 11 月 14 日の対横浜外人戦において，慶応チームの FB として出場した高橋忠次郎（田辺九万三：明治時代のラグビー (6)，『Rugby Football』第 1 巻 6 号（昭和 27 年 6 月），p. 23）は本稿で取り上げた人物ではない点を指摘しておこう。